

## 巻頭言 「ギレアドに乳香がある」

宇野 元

マリリン・ロビンソンの小説『ギレアド』。昨年、月刊誌「福音と世界」の拙文を通して紹介させて戴いた作品が出版されました（新教出版社）。この本の造り手の愛が感じられる装丁に感謝し、また奥付に記された発行日が、宗教改革 500 年の記念の日であることを喜んでいきます。最終作業は休暇の折に実家でおこない、秋雨の数日間、編集者と、E メールによらず電話とファクスでの取り組みに集中しました。日本語訳の出版に関心を寄せてくださった皆さま、お祈りしてくださった皆さまに、心から感謝いたします。

出版社から送られてくるゲラの見直しをしながら、時折、目の休憩を兼ねて音楽をかけました。何度も聴いたものに、**There is a Balm in Gilead** という曲があります。黒人霊歌のひとつです。『賛美歌 21』にはそれらが幾つか収められていますが、残念ながらこの曲はありません。私が最初に親しんだのは、ジェシー・ノーマンによる CD です。20 年前、三宮で見つけて、神学校の寮で聴いていました。隣室の迷惑にならないよう、音量をうんと絞って。このたびはスマホを用いて色々なバージョンを楽しみました。歌手により、また合唱団により演奏に幅があるものの、曲そのものから受ける印象はそう変わらないように思います。ノーマンのようなきわめてダイナミックな歌手の場合にも静けさを感じます。構成も、歌詞も単純な曲で、次の言葉がなんども繰り返されます。

ギレアドに乳香がある  
傷ついた人をいやす  
ギレアドに乳香がある  
罪に病む心をいやす

静かに力強く、ギレアドに乳香が「ある」と語られています。アフリカ系アメリカ人の歴史に思いをはせると、過去における多くの苦難と今もつづく苦闘の歩みを示されます。そんななかで、イエス・キリストのうちにある祝福が見つめられています。苦しい体験のなかで、この祝福の確かさが歌われていることに心を打たれます。